

OTA アート・プロジェクト

馬込文士村 空想演劇祭2022 作品上映& **同時収録** 生ライブ

大正末期から昭和初期にかけて、現在の大田区大森一帯は「馬込文士村」と呼ばれていました。近代文学を代表する名だたる文士達が集まり、一時期を過ごした地域です。2021年、彼らの残した作品を、舞台芸術と組み合わせ、映像という形で紹介する配信企画「馬込文士村 空想演劇祭」がスタート。2年目となる2022年は、女流作家に着目した2本の映像作品と、スタンダップコメディの計3本を配信します。当イベントでは配信に先立って映像作品を上映するほか、配信用にスタンダップコメディの撮影も行います。爆笑必至のライブを鑑賞する皆様も収録されるかも!?

2022.12.17(土)

第1回目 11:00 開演 (10:30開場) / 第2回目 15:00 開演 (14:30開場)

全席自由 / 各回 ¥1,500 ※未就学児入場不可

大田文化の森 多目的室 [所在地] 東京都大田区中央2-10-1 5F

[チケット発売日]

10月12日(水) 10:00 発売開始

[オンラインチケット]

<https://www.ota-bunka.or.jp/>

(24時間購入可) ※手数料がかかります。



[チケット専用電話]

03-3750-1555 (10:00~19:00)

※発売日14時以降は下記3館でも
電話予約・窓口販売いたします。(10:00~19:00)

[大田文化の森] 03-3772-0700

[大田区民プラザ] 03-3750-1611

[大田区民ホールアリア] 03-5744-1600

※公演前日19時までご予約いただけます。
※アプリのみ工事休館中につき17時までの受付。

映像作品上映

[映像ディレクター・編集] 米本直樹 [撮影監督] 鈴木正実

『千代と青児』(原作: 宇野千代)

構成・演出: 安田雅弘 出演: 劇団 山の手事情社

『花物語ごっこ』(原作: 吉屋信子)

演出: 屋代秀樹 出演: 日本のラジオ


スタンダップコメディ

『馬込の文士 2022』

出演・脚本: 清水 宏 構成・演出: 安田雅弘

スタンダップコメディアンが語る文士像とは? 馬込文士を代表する女流作家宇野千代と、吉屋信子を題材に、独自の目線で語る爆笑必至のトーク公演。どうぞ生ライブでお楽しみください!

※上演時は映像制作のための撮影も行います。客席が映り込む可能性もありますのであらかじめご了承ください。

【主催】  大田区文化振興協会 大田区 [新型コロナウイルス感染防止策の詳細は、大田区文化振興協会ホームページをご確認ください。]

【アートディレクター】 安田雅弘(劇団 山の手事情社 主宰・演出家) 【後援】 特定非営利活動法人 大田まちづくり芸術支援協会(asca)

【協力】 一般社団法人 大田観光協会、特定非営利活動法人 大森まちづくりカフェ、馬込文士村ガイドの会、特定非営利活動法人 馬込文士村継承会、劇団 山の手事情社



“アートでまちづくり”をテーマに、大田区に点在する
さまざまな文化芸術に関わるヒト・モノ・コトを資源として紹介し、
未来に向けて新たに共創していくための創造プロジェクトです。



安田 雅弘 *Yasuda Masahiro* / 「馬込文士村 空想演劇祭」アートディレクター

東京生まれ。演出家。劇団 山の手事情社主宰。早稲田大学在学中に劇団を結成、日本の現代演劇を代表する劇団の演出家として、国内外で評価されている。2013年ルーマニアのシビウ国際演劇祭より「特別功労賞」を受賞。さまざまなワークショップの講師もつとめ「自分を魅力的に見せる多方面にわたるヒント」としての〈演劇的教養〉を一般社会で活用することにも力を注いでいる。2018年『魅せる自分のつくricat』(講談社選書メチエ)を上梓。

劇団 山の手事情社 *Gekidan yamanote jijosha*

1984年、早稲田大学演劇研究会を母体に結成。以来、一貫して「演劇にしかできないこと」を追求する、実験的な作劇を展開。1993年・1994年には“下丸子[演劇]ふえすた”に参加し、現代演劇を代表する舞台芸術集団として発展。1997年より現代人を

屋代 秀樹 *Yashiro Hideki* / 脚本家・演出家・日本のラジオ代表

千葉県出身。國學院大学日本文学科卒。大学卒業後に演劇を上演する任意団体「日本のラジオ」を旗揚げ。以降、主催団体の全作品の脚本とほとんどの演出を担当するほか、外部団体への脚本提供や演出も手がける。作風はコメディ、ホラー、怪奇、サイコ、ノワール、不条理コトなど、主に負のベクトルに幅広く、また、馬込文士村参加作品以外にも、夢野久作や太宰治など、文学作品を再構成した作品も多く発表している。



日本のラジオ

読み方は「にほんのらじお」。代表である屋代秀樹が自作の戯曲を上演するため立ち上げました。怪異、アウトロー、実際あった猟奇事件を下敷きにしたものをよくやっています。残酷な結末になることが多いですが、「観た後さわやかな気持ちになる」と言われることもあります。短編の場合は、怖くないけど奇怪なコトをやったりもします。シンプルな舞台演出、余白のある醒めたセリフが特徴です。淡々とした世界を、こっそり覗き見る感覚で観ていただけたらと思います。